

先住アメリカ人作家たちの世界

須田 稔

ボルネオ島にあるマレーシアのサラワク州は、世界の熱帯産木材の3分の2以上を生産している、伐採の割合を現在の半分にしてもサラワクの原生林のすべては2000年までに消滅してしまうだろうと予測されている。「彼らがいう開発とは、飢え、依存心、無力感、そして私たちの文化の破壊と私たちの同胞の失意でしかない」、「私たちはヨーロッパ文明がつくり出したあの進歩のモデルに盲従すべきではない。……富んだ世界は大きなストレス、汚染、暴力、貧困、精神的空虚さに悩まされている。先住民の社会の富はお金や物にあるのではなく、共同体や伝統や特別の土地の一部であるという感覚、そういったものにある」、と先住民が語る（ベス・リシャロン『先住民とともに生きる』pp.28-32, 岩波ブックレット, 1994）。国連は1993年を先住民年とした。

1968年8月、カナダのエドモントン市の南約80キロにある保留地から、約140人のインディアンがクーテネー高原の山中に移住した。「飲む、盗む、喧嘩する、殺す、の白人文明はもうたくさんだ。子供達をあんな大人には育てたくない」からであった（藤永茂『アメリカ・インディアン悲史』, pp.242-243, 朝日選書, 1974）。

カナダの先住民コサリッシュ人は語る。「人びとのあいだに在る憎しみも わたしには理解しがたい。過去いくつもの戦争で何百万人を殺害したのにそれを正当化し、いまこの瞬間もさらに尨大な数の人びとを殺す爆弾を準備しているような文化は 理解しがたい。援助と発展のための教育と福祉に費消するよりは戦争と殺人兵器に費消する方が多いというような文化は わたしには理解しがたいのだ。同胞を憎み戦いをしかけるばかりか自然界に襲いかかり濫用するような文化は わたしには理解しがたい」（須田稔「カナダ先住民の口承文芸作品 *My Heart Soars* の抄訳」、『立命館産業社会論集』第27巻第2号, 1991年9月）。

カナダ先住民デネー人は、「大地はわれわれの生命であり、われわれの血だ」、「大地は息をする人間的存在の一部だ」、「大地は母。大地はすべてのものに生命と食物を与え、すべてのものを守り慰めるから。大地が苦しむとき人間も苦しむ。現に世界の至る所で、人間は大地をいじめ、そのゆえに人間も苦しんでいる。大地は教師。人間がすべての生命を敬し愛するなら、惜しみなく愛を注いでくれる」と語る（新保満『カナダ先住民デネーの世界——インディアン社会の変動』, pp.117-118, 明石書店, 1993）。

アメリカ先住民ラコタ人は祈りの最後に、食事にたいする感謝の言葉のあと、会議の開会・閉会の挨拶のあと、選挙演説の締めくくりに、「ミタクエオヤシン」と言う。「私に繋がる全てのものの」の意であり、親族をはじめとする人間ばかりでなく、動物・植物、山や川、宇宙の全てを意味する。それらのもののおかげで自分は生かされているのだという認識、自分はそれらのもののために生きるという誓い、それが「ミタクエオヤシン」なのだ（阿部珠理『アメリカ先住民の精神

世界』, pp. 98-99, NHK ブックス, 1994)。

先住アメリカ人のイロコイ人は、「富の分配のシステムは改められなくてはなりません。不平等が現在そして未来の人間の生命と自然を破壊するからです。西洋社会は、生命を支える自然のシステムを最優先し、物質主義へのこだわりを直すべきです。人間社会の基盤は物質ではなく、精神性でなければならないのですから」と言う。シネコック人は、「白人のやり方はレイプと同じよ。白人はインディアンの生き方を犯しているのよ。これが白人の残した遺産よ。私たちは絶対にその一部には成り下がったりはしないわ」と語る。ホピ人は言う、「偉大なる精霊は私たちをこの地の守り人にした。私たちはこの地を祈りと儀式で守る。白人は、この大地を露天鉱やウラン残土や発電所で毒し犯し破壊している、すべてこの聖地で。そして、この不正行為を続けるために、この地に残る最後のインディアンを追い出そうとしているのだ」（ステイヴ・ウォール、ハーヴィー・アーデン著、鈴木アデルみさ訳『ネイティヴ・アメリカン——叡智の守りびと』 p. 27, 45, 96, 築地書館, 1997)。

1992年の500周年を転機に、コロンブスのアメリカ“発見”は“到達”あるいは“遭遇”に修正され始めたし、国連が「先住民年」と設定した1993年いらい、先住民族の歴史と世界観と生き方は広範に注目され始めた。アリストテレスの先天的奴隷人説や聖アウグスチヌスの奴隷制是認の教説など西欧の体制的イデオロギーがもたらした罪業は深刻である（L. ハンケ著、佐々木昭夫訳『アリストテレスとアメリカ・インディアン』岩波新書, 1974, を参照）。

筆者はアフリカ系アメリカ人の歴史と文学への関心から、アイヌ民族とアメリカンインディアンへの探究を触発されている。本稿はアメリカンインディアン文学への探究の第一歩として、Laura Coltelli 著の *Winged Words: American Indian Writers Speak*, (University of Nebraska Press, 1990) に収められた11人の小説家・詩人とのインタビューから、筆者の問題関心に従い、主題別に彼らの発言を要約しようとしたものである。

著者はピサ大学のアメリカ文学準教授で、UCLA アメリカンインディアン研究センターとアメリカ文化研究所を活用してこのプロジェクトを進めたという。11人の作家たちの主要な著作すべてを熟読吟味した上でのインタビューである。話題は多岐にわたっている。

筆者がこの研究ノートを発表するについて感じる逡巡は、この著作の刊行は1990年であり、筆者が入手したのが1992年11月末で、その時からすでに5年もの歳月が経過していること、加えて、インタビューが行われたのは1985年（Paula Gunn Allen には3月18日、ほかの10人には9月5日から26日までのあいだ）であって、いまから12年も過去のことになっているのであり、1997年の今日のアメリカンインディアン作家たちの世界とのあいだに思わぬ懸隔が生じているかもしれないとの危惧である。

なお、用語上の問題として、著者も作家たちも Native American と American Indian と Indian を併用していて、筆者もそれに従ったこと、筆者は「族・部族・種族」ということばを避けたが、原文で tribal culture などとある場合は「部族文化」としたことを注記しておく。

1. 人類学の対象か

Wendy Rose (1948-) は言う。アメリカの大学で開講されるアメリカの文学や芸術の科目は、ヨーロッパ、それも主要には北部ヨーロッパの伝統を継承するアメリカ人が創出した文学なり芸術を扱っていて、黒人やインディアンは除外される。アメリカの教育制度を通過しての印象は、この国には白人しかいないということである。このことは文化の問題にとどまらず政治の問題である (p.122)。

インディアン文学を論じる博士論文に対処してくれるカリフォルニア大学バークレー校の学科といえば、人類学科だけであって、比較文学にも英語学にもその意志はなく、英語学科が言うには、アメリカンインディアン文学はアメリカ文学の一部ではないから、この学科にはなじまないのである (p.124)。

書店でも、先住アメリカ人文学は「人類学」と標示されたところに並べられている。こういう隔離が政治的であるのは論をまたないが、哲学的のみならず経済的なものでもある (p.127)。

その人類学を Gerald Vizenor (1934-) は次のように批判する。人類学では万事が創作であり、西欧の拡張という文化植民地主義の伸展である。人類学にたいするわたしの見方は、人類学者たちが自分たち自身を見る見方と大きく異なる。彼らのインディアン観はわたしのそれとは大きく異なる。人類学者は、自分たちは正しいと信じており、自分たちが方法論的に構築してきたことは社会科学的方法であるがゆえに真実であると信じているが、わたしの考えでは、彼らの方法論はどれほど客観性を装うとも狭隘で偏狭で植民地時代風で、部族の人びとについて論じてきたことのすべてとは言わぬまでも大半は、どうみてもばかばかしいことなのだ。おまけにヒューマーさえない。彼ら人類学者の方法論は、文化の創作を熱心に追求してきたあげく、人間的精神を歪曲してきたのだ。彼らは文化を創作してきた。Ph. D. を取得して大学で力を獲得するためには文化が必要というわけだ。そういう力をもつ者たちが文化を支配する、なぜなら、文化について彼らが構築してきた概念規定や象徴や仮面は彼らが制御しているのだから (p.161)。

人類学者たちは、あらゆるものを部族文化から借りただけで、名札なり文化の方法論的創作物を押しつけ、自分たちの力を維持するためにその創作物を保持してきた。大抵の人類学者は、そこにヒューマーと遊びの可能性も否定する。彼らは悲劇的世界観をもつ悲劇的人間であって、遊びが許せない。遊びを許すと、自分たちのイメージと文化支配に及ぶ力を失うという事実と直面しなければならなくなる。その結果、インディアンはかくかくの人間であり、Vizenor とかほかの混血の連中はインディアンではないという考え方を育てる。わたしが彼らの方法論を批判しても、彼らの弁駁は、わたしがインディアンでなく、知りもしないのに、ということになる。わたしも彼ら同様に知らないのは事実だが、わたしは文化を創作するなどということはしない。わたしは想像力を駆使するし、この想像という行為が人間的精神的経験への可能性を開いてくれると信じている (p.162)。

人類学者たちはアメリカンインディアンの世界と思想を解明できずにいる。正しく解釈したことは一度もない。部族文化についての彼らの歴史学的・人類学的要約は全くもって馬鹿げている

(p. 169)。

彼らは文化を創作してきたのであり、そのことはインディアンとは何の関係もない。それが彼らの本分なのだ。彼らはマイクロフィッシュをかざして、印字されたイメージを通して世界を変えることができる。データを蒐集し、それを仕分けし、ごちゃ混ぜにし、再創作する仕方は興味深い、そういうことはインディアンとは何の関係もないし、知性的ヒューマニズムとも関係ない。人間研究という人類学で人間の行動のある種の実相に迫っているのだと考える人たちの気分を害するかもしれないが、それは人びとを分断するのだ。社会科学の方法論は人びとと人間的精神を分断する、人びとを一種の知性的ヒューマニズムから分離する (p. 170)。

2. 非インディアン読者・批評家の見方

Michael Dorris (1945-) と Louise Erdrich (1954-) 夫妻は誰よりもまずアメリカンインディアン読者のために書いていると言う。Erdrich は、インディアンを共感を誘う人物、非典型的な人物、非インディアンが一体感を覚えるような人物として提示できるようになりたいと言う。最悪の偏見をもつのはインディアンの近くに暮らす人たちで、距離のあるヨーロッパの方が偏見は薄い、と彼女は観ている (pp. 47-49)。

Joy Harjo (1951-) は、非インディアン批評家には二つのタイプがあり、一つは、それには及ばないのにインディアンになろうとする人たち、もう一つは、罪責感や、馴染みのないものには近寄らずにいたいという怖れからか、インディアン文学を読もうとも語ろうともしない人たち、と言う (p. 64)。

Wendy Rose は、カリフォルニア大学バークレー校の先住アメリカ人研究で10人の学生に教えたことがあり、その後フレズノのカリフォルニア州立短期大学で50人に教えて、後者の方が受容力がある、と言う。前者では授業中に彼女を 'squaw (女性一般にたいする、特に北米インディアン女性にたいする侮蔑的呼称)' と呼ぶ学生たち、キャンパスを歩いているとき本質的に人種差別主義的な無礼な言葉をわめく学生がいたし、政治的論争を招くようなことは喋るなどとも言われていた。そのこともあって彼女は移籍したのだが、短大の学生のなかには、聖書に書かれていないことは真実ではないという狭い視野で育てられてきたため資料にまともに取り組めない者もいて、これが主たる難点だが、明白な敵意ほどの大した問題ではない、と彼女は考える (pp. 130-131)。

非インディアン批評家が作品を批評してくれるのは有益だが、困惑を覚えるのは、論評の冒頭に、人類学の知識が十分でないので正当に評価することは實際上難しい、と述べる批評家である。わたしは詩集を英語で書いているのだから、そういう批評家は頭に来るのだ。ホピやほかの先住アメリカ人の語句とか日本語の語句、つまり英語にない語句を使うときは、説明をつける。読者の大半は英語でなら読めるだろうからと、礼儀として脚注をつける。学究的詩人は文化に固有の用語を使うなら同じようにしてほしいのだが、そうはしない、と彼女は言う (p. 131)。

Gerald Vizenor が語るバークレー校学生の反応は、W. Rose のそれとはかなり違う。肯定的側面を強調してはいるのだが、インディアン文学は他と比べて近づきやすく、はるかに興味深い

と受けとめられている、と彼は言う。内容がユニークであることと、文学は生命力のある想像力豊かな仕事なのに、まるで標本みたいにはばばらに切断する文学教授が多いけれども、われわれはそうはしないこと、それに、担当教員の意識的努力もあって、学生との交流に時間を割くことが学生には好評であること、などが理由と考えられる。インディアン文学は多くの人にとって新しい文学であり違った文学であり、そこにわくわくするのだ、と彼は考える（pp.176-177）。

インディアン文学にエネルギーと学識を注いでも金儲けにならないし、いくら注目しても昇進はしない、むしろ昇格の妨げになるくらいだ。だから、おためごかしのお世辞を受けたこともある。それでも真剣に取り組む人が増えてきているのは嬉しい、と彼は言う（p.178）。

James Welch（1940- ）は非インディアン批評家の仕事を好意的に評価している。生い立ちや教育などの制約から、インディアン文学には外側から迫らなければならず、インディアン全体を包括的に理解して次に特定のタイプのインディアンを、ということになる。その文学を文学的あるいは社会学的用語で語ることに終って、文化的用語で自信をもって語ることはできずにいる。それでも、なかなか良い仕事をしている。インディアン批評家の数が十分かどうか知らないが、インディアンの中に批評家がいるとすれば、その役割を果たしているのは作家たちだ。インディアンで学究的な仕事に入る人は大抵は歴史学とか社会科学の分野に進み、文学に終始する人は多くない、と彼は語る（p.194）。

ヨーロッパ人のアメリカンインディアン観を問われて、彼はドイツでのアメリカ研究会議に Scott Momaday とともにパネリストとして参加したときのことを語る。大抵のドイツ人は Karl May が書いたインディアン物語で育っていて、その物語はロマンティックな、James Fenimore Cooper タイプの話で、インディアンはロマンティックな英雄像であり、他方で気高い野蛮人である。会議にはアメリカ南西部に赴いてプエブロやナヴァホの文化を研究した大学教授が多かったのだが、その一人が「なぜインディアンは政府に反抗しなかったのか」と、60年代の黒人の運動を引き合いに出して質問した。都市部と辺鄙とでは、運動のインパクトなり注目度に大きな格差があること、しかしアメリカンインディアン運動（AIM）は Wounded Knee, Mount Rushmore, Alcatraz Island などに出て注目を集め一定の成果を得たことなどを答えたのだが、要するに、ヨーロッパ人は一方で高貴な野蛮人というロマンティックな見方をもつ傾向があり、他方で現在のインディアンが状況を改善していない理由を理解できないでいるのだ。状況を改善したいと強く思っているのにできていないのは何故なのか、説明は難しい。一つには経済的な問題がある。大半の保留地には産業はないし、あっても零細で相当の人口を支えることはできない。こういう現実を理解してもらうのは容易でない。それもヨーロッパ人だけでなく、東海岸の人たちや西海岸の人たちにも。彼らはインディアンの状況の実相を見たくないのだ（pp.195-196）。

一つの文化が他の文化のことを十分な時間をかけて読みたいと思うなら、文学研究が異文化間コミュニケーションに重要な意味をもつのは簡単なことなのだ、と彼は言う。大抵のインディアン作家は、自分はインディアンが生きてきた伝統的な、あるいはいま生きている当代風な生き方を語っていると思っているだろう。問題は、彼らが必要と感じているメッセージを発信するインディアンの人びと、インディアン作家の側にあるのではなくて、そのメッセージを受けとる人びとの側にあるのだ。不運なことに読者は少数で全く無力。外部に少数の大学教授、インディアンに関心を寄せる少数の人びとはいるものの、まだ少数。読者となりインディアンについて理解を

深めようとすべき人は、政治の中枢にいる人びと、インディアンに関わる産業に身をおく人びとなのだが、彼らは読まないし、気にもとめない。インディアン問題は、これまで全く巧妙に制御され抑圧されてきた問題であって、彼らがインディアンに大きく注目し始めるなら、インディアンの置かれた状況について何かをしなければならなくなる問題なのだ。だから、そうした権力をもつ人びとはインディアン文化について一切知らずにいることが有利になるわけだ（p. 196）。

インディアン作家はインディアン大衆の中には多くの読者をもっている。保留地や大学でそれを教えようという人たちがいるおかげだろうが、保留地にも都市部のインディアン社会にもインディアン作家の小説や詩集を読む読者はいるのだ（pp. 196-197）。

Linda Hogan（1947- ）はコロラド大学ボルダー校でアメリカンインディアン研究を教える中で、非インディアン学生を次のように考察する。非インディアン学生の多くが精神を、自分自身の魂を必死に探し求めている。現代世界の何かはヨーロッパ系アメリカ人やヨーロッパ人を根なし草にしてしまい、昔にはあるいは先住民には存在したにちがいないものを憧憬させている。彼らが欲しいのは自分自身の人生、大地に寄せる自分自身の愛。だがそのことを自分たちの言葉でしゃべっても、その言葉自体を信じられない。だからインディアンに目が向く。だが、啓発が週末のワークショップで見つかるものではないし、大半のインディアンがアメリカ的生活の危機的状況を、化学廃棄物の毒素を、白人アメリカ人の中に抑えこまれている者の痛みを生きている事実を忘れていて。即席でシャーマンに、即席で治療師に、即席で霊化した人になれるわけがない。コロラドやカリフォルニアで白人シャーマニズムが大きな運動として拡大しているが、その裏でインディアンの生活の実態が見すごされ、それはまるで、強制収容所内のユダヤ人を見て、「わあ、この人たち美しいわね、ユダヤ神秘主義って素晴らしいじゃない」と言うのに似ているのだ（pp. 75-76）。

3. 文化変容の実相

Paula Gunn Allen（1939- ）は語る。失業率が60～70%の保留地では仕事がなく生きられない。だから大半の人びとは都市部に定住するか、保留地と都市部を往き来するのだ。何千年何万年のあいだ田舎暮らしをしてきた人びとも、世の中が変わって全く別なテクノロジーの宇宙と折合いをつけねばならなくなった。葛藤が生じる。わたしがわたしであるという感覚をどうすれば持ちつづけられるか。わたしの伝統、わたしの言語、わたしの世界観とつながったままではどうすればいいのか。アメリカでインディアンと非インディアンの人口比率は1：1,000,000。これは、インディアンを理解する人は一人もいないということだ。古い伝統から離脱すれば、家族も、ついにはあなた自身もあなたを理解できなくなる。その果て、自殺する、アルコール中毒になる、そこまでいかないまでも功成ることはない。わたしがわたしであるという感覚を保持しつづけることは容易でない、不断の闘いなのだ（pp. 12-13）。

女性中心文化あるいは女性尊重文化は、いまや口にするのも憚られるほどのステータス喪失にさらされ、既成の体制全体、人類学者たち、民俗学者たち、宣教師たち、そして遂には過去20～

30年のあいだにインディアン自身までが、かつてのステータスの記憶を失ってしまった。女性にたいする暴行殴打と強姦、この二つほど文化変容の激しさを語るものはない。女性を尊敬しない、同性愛にたいして敵意にみちた態度をとること、この二つだけでも文化変容、伝統喪失を語るに十分だ。わたしがインディアン女性たちのことを書くのは、望まれていない (pp.13-14)。

Michael Dorris は、インディアンは消滅しつつあるかという問いに、否と答えると思うと言う。土着の部族文化も他のすべての文化と同じように変化してはきたが、現に息づいていると考える (p.45)。

Joy Harjo は語る。南西部のプエブロの人たちのように大地を女性と見なす場合は特にそうだが、インディアン文化のあるものは女性指向だ。だが、白人と接触する年月の中で価値観も変化し、多くは男性中心ないし男性支配の文化、ヨーロッパ的アメリカ文化のパターンに追随した文化へと発展というか移行した。とはいうものの、女性は概して、過去も現在も、男性よりも肉体的にも感性的にも大地に根ざし大地と和合している (p.60)。

Linda Hogan は、文化変容がアメリカンインディアン女性のライフスタイルを変化させた程度は壊滅的だと言う。たとえば寄宿学校制度だが、幼少の子どもを家族と家庭から引き離すことで家族システムと部族システムを崩壊させてしまい、家族を形成し母親であるためには改めての自己教育が必要となるのだ。この心理的損傷は極めて深刻だ。しかも、これはほんの1例。一方でインディアンをロマンティックに描き出すかと思えば、他方で危機的状况があり、貧困だけでなく虐待がある。性的・肉体的虐待、子ども殴打の件数がインディアン居住地域内で増えている。1民族が被害者となれば、激しく闘って自身を政治化し、円環を断ち切れるように、再び力をとり戻して自身の健康と全一性を獲得するようにならなければならないのだが、問題が身近かであるだけに二重の困難がある (p.81)。

4. アメリカンインディアン文学は多民族文学

Louise Erdrich は言う。アメリカンインディアンが書き手ならアメリカンインディアン文学だと考えるのは、多くの人が犯す大きな誤りの一つだ。ヨーロッパにいてフランス文学をヨーロッパ文学と言うのと同じだ。ほとんどすべてのアメリカンインディアン作家は英語を主要言語として第1言語として話すけれども、彼らはみな伝統も背景も世界観も神話もそれぞれ違うのだ (pp.46-47)。

Paula Gunn Allen は自身を「橋であることのひどい苦痛を立証できる、そして同時に、そうした伝統が生む現実参加とヴィジョンの力強さと明晰さを立証できる、多文化的事象 multi-cultural event」と呼ぶ。彼女の母は白人との混血ラグナ、母の祖母は純血ラグナ。母の祖父はスコットランド系アメリカ人。母は英語とメキシコ系スペイン語の両方を話しも読み書きもできる。父と結婚してローマカトリックになった。Paula もカトリックとして育った。祖母はプレジビテリアンでインディアン、祖父はドイツ系ユダヤ人。父方はレバノン人の血統で、父は合衆国生まれとはいえ政府供与地のメキシコ人村で生まれ、10歳まではスペイン語とアラビア語を話

し、ローマンカトリックとして育った。こういうわけだから、Paulaの親戚が話す言語は、アラビア語、英語、ラグナ語、ドイツ語、スペイン語。宗教は、プレジビテリアン、ルーテリアン、プロテスタントとカトリック、そしてインディアン信仰。加えて、彼女の身内は域外結婚の慣習があって、イタリア人、スウェーデン人、サルヴァドル人、ユダヤ人、イギリス人の親戚がいる。それで彼女は自身を多文化的事象と呼ぶ。世界全体もいくつかの面では同じであり、彼女が生き延びて他者と交流できるのだから、互いに異なる諸民族間でもそれは可能だ、と彼女は確信する。そして、彼女は、アメリカンインディアン文学は多民族文学である、と見る。彼女は7人の作家の小説7篇の部族的要素を抽出する。N. Scott MomadayのなかにNavajo, Jemez, 主要にはKiowaを、Louise ErdrichとGerald VizenorにはChippewa 別名Anishinabegを、というように、文化的多様性を分析できると考える（pp.16-18）。

Wendy Roseも先住アメリカ人文学を事実の問題として多民族文学だと言いきる。部族間の差異は時代を遡ればそれだけ明白で、1930年代のプエブロの人が書いたものとスーの人が書いたものの差異は深い。もちろん、Simon Ortizのような例外もあり、彼の出自は明らかにプエブロなのだが、長じては汎インディアンになった。Roseの考えでは、汎インディアンであることは部族性を稀薄にすることではない。両者は共存し、汎インディアン主義ないし汎インディアン性は部族的アイデンティティを保護することを目ざすものであって、それにとって代ろうとするものではない（pp.128-129）。

〔聴き手のLaura Coltelliが‘Pan-Indianness’ということばを使うのに、ErdrichもRoseも‘Pan-Indianism’ということばで応対している。〕

〔因みに、本書に紹介される作家たちの家系・血統を見ると、Paula Gunn Allenはof mixed Laguna, Sioux, and Lebanese descent。Louise Erdrichの父はof German descentで、母はa Turtle Mountain Chippewa。Michael Dorrisの父方はModoc tribe。Joy HarjoはCreek tribe。Linda Hoganの父はa Chickasawで母は白人。N. Scott Momadayの父はa Kiowaで母はof Cherokee descent。Simon OrtizはPuebloの血をひく。Wendy Roseの父はa Hopiで母はa Miwok mixed-blood。Leslie Marmon SilkoはLagunaとMexicanと白人の混血。Gerald Vizenorはof mixed French and Chippewa descent。James Welchの父方はBlackfeetで母方はGros Ventre。〕

5. 混血であることとアイデンティティ

Vizenorは言う。人を区分する第1のカテゴリーの一つは性に次いで肌色、という社会に暮らしているわけだが、肌色こそがアメリカ文化における最も意味深いカテゴリーなのだ。だから混血の人間はトリックスターになる可能性をもたされてしまう。どこにいようと、生き延びるための新しい行為、想い描く新しい生きかた、あれこれに取り組む新しいやり方、を組み立てようとする。トリックスターの着想、生命のエネルギーが不断に想像力をかきたてる、と考える（pp.164-165）。

Vizenor は、部族文化の中の伝統を観念的に単一に定義しようとするのは末期症状だと言う。文化なり人間の行動様式は静態的でない、人間は人類学者たちが規定する通りの存在ではない。一つの定義に従って生きるなどすべきでない。そういう定義はファシスト的利害で操作できる。われわれは誰でも非常に複雑な人間存在であるが、とりわけアメリカで、とりわけ部族集団では、とりわけ混血ではそうなのだ。混血人は部族的なものや西欧的なものの実際に肉体的な結合を体現している。自分の場合はフランス人とアニシナベグ人別称チッペワ人との結合なのだが、自分が選択したのではないけれども、犠牲者などとは考えていない (p.172)。

混血人は中間の存在でありトリックスター。伝統でも反伝統でもないし、強者でも弱者でもない。意味を布の面ではなく縫い目に見つけなければならない。縫い目に主張が、エネルギーが、焦点がある。中間的存在に固定したイメージがないのは幸いで、意味は遊びの中に、痕跡の中に、差異の中に、そこにないものの中に在る。それは言葉の語義的意味の中になく、言葉の非語義的意味の中になく。いわば二つの語の中間、一つの語のいくつかの定義の中間にある。混血者はこれでもあれでもない。上でも下でもないし、聡明でも愚鈍でもない。それだけに想像力豊かな表現が必要となる (p.174)。

Joy Harjo はオクラホマ州タルサで生まれた。そこは彼女にとって母なる土地であり、彼女を繋ぐ臍の緒があり、霊的にも繋がれている。が、そこに住んでいないし住むこともない。あまりに親密でありあまりに苦痛に満ちているからという。クリークの伝統通りに育てられたのではないが、精神構造の深層にはその記憶が豊かに埋まっている。育った地域には混血のインディアン家族が多く住んでいて、セミノールインディアン、ポウニー (Pawnee)、そのほかの部族の人びと、そして白人が隣人だった。書くときは彼女の内部にクリークの老人がいる。彼女が意識的に選んだのではないが、クリークの方が彼女を選び、彼女の内部に住みついたのだ。彼女は生粋のクリークではない。時として彼女は都会の人混みの中に姿を消して責任から逃れられたらと思うが、できない。アメリカをよく知ろうと車で一人旅をした折、訪ねた大事な場所の一つはアラバマ州のアトモアという小さな町のはずれのクリーク居住地だった。彼女は歓迎されたが、オクラホマクリークとアラバマクリークの間で交流が始まっているという。彼女のオクラホマクリークはいまも言語を、舞踊を、儀式を保持しているが、アラバマクリークは多くを失っているものの記憶は守り継がれて、人種差別主義南部で小さな孤立集団は生き延びてきた。彼女の父方はもともとアラバマ出身だったが、1832年の強制移住 Removal のころに追い出されたのだ。彼女の曾祖父の父メナウハはアンドルージャクソンに抵抗するクリーク部族のレッドスティックの戦いを指導したのだった。メナウハは白人の顔は二度と見たくないと言ったという。反逆者、発言者という血筋を彼女はひいている。若いころ彼女は自己憎悪の塊だった。いのち取りになるかと思うほどのおそろしい沈黙、それを覆すのに書くという行為が彼女を救ったという。インディアンは黙っていれば消滅してしまう。書くことは生き延びるための一つの手段なのである (pp.56-57)。

Joy Harjo は多くの女性団体に関わっているが、積極的な関与は大事だと思うものの、実際面ではそうでない。なぜかと自問して、混血人であるためかとも思う。他者との繋がりは感じているが、多くの女性グループは白人が多数派で、正直なところ彼女はくつろげず時として寡黙になる。長いこと両方の世界を往き来してきて黙って喋ることも学んできた。ところが、居合わせる多くの人たちの代弁者を演じてしまうことがある。まるで喜劇的で突拍子もないことになる。あ

る文学論の集まりで、インディアン、黒人、それに女性やレズビアンやゲイのグループを含むすべての少数派の人たちの代弁者に何度となくなりましたが、おかしくも腹立たしいことだった。みんなアメリカ文学の主流からはずれた存在に見られていたからだが、実際はその中心部により近いところにいるのだから（p.61）。

Linda Hogan の父はチカソーで母は白人。このことは自然な緊張を生み、それが彼女の作品で表面化し作品の強さの源泉になる。文学への関心が増すにつれて、父の家系から口承文学の伝統を受け継いでいるのだと自覚する。それは彼女の想像力を強め、執筆の最中にもチカソーの人の声の聞こえてくる気がするのだ。文章作法の教師の多くは彼女のことばと主題選択にがまんならなかったのだが、やっとなことインディアン文学に興味をもつ一人の教師に出会って、彼女は失っていた自由をとり戻し、自分が夢中になっているから書くというよりは、自分を理解しようとしな教師たちのために書くようになった。彼らは彼女たちインディアンが存在しないものと信じさせたがっているのだから（pp.71-72）。

女であり少数民族であるという状況の難しさをインディアン女性は知っている、と彼女は言う。それは二重の、あるいは三重の不運なのだ。少数民族の女性と白人女性の運動を統合するのはいくつかの点でかなり困難である。優先課題が異なるのだ。同一賃金は万人にとって大事なことだが、少数民族の女性の中には支配文化育ちの女性たちが得てきた機会に恵まれていないから、基礎的な技能も修得していない人たちがいるのだ。なんとか慣れて生き延びようと頑張ることと、企業の中で白人男性と同等の地位にのしあがろうとすること、これは基本的に異なる課題なのだ。この二つの島に橋を架けることが果たして可能なのか、じっくり考え抜かなければならないと彼女は思う（pp.80-81）。

Wendy Rose の父はアリゾナ出身の純粹のホピで、保留地に住む。母は大半はスコットランド人とアイルランド人の血だが、ミウォック（Miwok）というヨセミテ国立公園近くの出身のインディアンの血も混じっている。この両親のそれぞれの側の彼女への扱い方から、彼女はずっと混血の自分を意識してきた。白人家系の方は彼女を黙殺し、彼女の母がウェールズ人と結婚するとなると腹を立てた。ウェールズ人ですら彼らの好みからするとあまりにエキゾチックだったのだ。父方のホピは彼女の置かれた状況に共感を寄せてくれるのだが、血統は母親を通してなので、父親がホピであってもホピ社会では彼女は法的に実効的な地位にない。生物学的な意味でホピ社会の出自の人間ということではしかない。彼女は精神的に情緒的にホピ社会の出身だと自覚するが、文化的には都市化された人間、汎インディアンの存在だと自認している。さまざまな部族のインディアンと交流しながらも、特定の集団と深い絆で結ばれているという感覚もない。混血であるということは、単に生物学的事象であるのではなく、歴史の、文脈の、状況の一つの条件であり、政治的事実である。そして彼女は、今日の世界ではすべての人間が混血人であるとも考える（pp.122-123）。

6. 口承伝統——ことば・記憶・書くこと

繰り返すが、Joy Harjo は、彼女たちオクラホマクリークが、その多くを失ったとはいえ今なお言語・舞踊・儀式を保持していること、この孤立小集団が南部人種主義社会で生き延びてきたこと、アンドルー・ジャクソンが破壊をもくろんだクリーク性がいまでも息づいていること、この源泉の力に記憶があったと言う（pp.57-58）。

彼女は、ことばが世界を規定する、英語は男性言語であり、部族を表現できないし、精神を表現できない、と書いた。彼女はもちろん英語を愛し、英語が表現できることを愛してきたのだが、英語のもつ男性中心性、名詞への傾斜を桎梏と感じてきた。それゆえ、英語を用いて部族らしい精神的ことばを表現するのは挑戦なのだ。彼女はアメリカ文学の中には、ヨーロッパ的魂に根ざさぬもの一切にたいする信じがたいほどの否認があると考える。他の一切を foreign と見て、アメリカ文学と呼ばれるものへの統合を意識的に拒否する心性を感じとっていて、彼女はそれをアメリカで起きたことにたいするひどい罪悪感に裏打ちされた自民族中心主義であろうと見る（pp.62-63）。

インディアン口承伝統の重要な一側面は風景についての理解、空間感覚だ、と N. Scott Momaday (1934-) は言う。何千年、もしかして3万年にもわたる北米大陸での生活体験の中で、先住民族は風景に一種の精神注入をおこなってきて、自己の存在をその土地との関わりで考える能力を身につけてきたのであり、空間感覚、帰属意識を確定するようになった。そしてこれがアメリカンインディアン口承伝統の大きな特徴であり、書くという行為もこの口承伝統から自然に湧き出るのであって、空間感覚はどちらの場合にも決定的に重要だ、と彼は語る。さらに、この空間感覚は、大抵の文学で、差異はあっても重要なものなのだ（pp.90-91）。

Momaday は、口承伝統と成文伝統は見かけほどは違わない、小説を書いている作家も口承伝統で物語を語る語り手もかなり同じ活動をしていると言う。作家も語り手と同じく言葉において自分自身と読み手（聞き手）を創出することに心を砕いている。両方とも創造の営為なのだ。そして、現代アメリカンインディアンの著作活動のすべては、同一の民族的体験、歴史と先史に原点があり、アメリカンインディアン文学を特徴づけるものは口承伝統から発生しているということ、つまり口承伝統が現代アメリカンインディアン文学の根源にあるということなのだ。自己のインディアン性から書いているインディアンは、意識するしないに関わりなくそれを内蔵しているのだ（pp.93-94）。

彼は散文詩は韻文詩よりはインディアン口承伝統により密接な結びつきがある、口承伝統は散文詩のモデルをもっている、と言う。散文詩の中では物語を語り易いからだ。そして、インディアンは言葉に向けて明敏な顧慮を払ってきたことでアメリカ文学全体の重要な一部分となりつつあり、25年前までは思いも及ばなかったことだが、アメリカ文学に口承伝統あるいはその要素を含めないわけにはいなくなっている。1000年以上も前、アルファベットの発明以前に口承伝統は遡るが、Merville を口承伝統の中のアメリカンインディアン先人たちと絶縁して考えることはできない（pp.94-96）。

1964年に白人との関係に言及して、「不寛容の徳性は20世紀に憐憫のそれになった」と考察し、当時のアメリカ白人は全体としてインディアンに関して曖昧ないし矛盾に陥っていると論じた彼は、20年後、憐憫の徳性も別のものに変化したと感ずることになる。インディアンは同化の方向へ大きく歩み出したのだ。保留地の境界線を越えて広大な世界で生きることが可能になっている。もっとも内奥の重要な価値観を犠牲にすることなくだ。依然インディアンでありつづけ、新しい経験と新しい領域へもそのインディアン性を携えて入る。一時期にインディアンはアメリカ人の心に一つのイメージとして凍結されるという危機があったが、いまはそのイメージを除去して、スクリーンの上で John Wayne に追い回される姿より活力を備えて適応能力をつけた存在になっている (p.96)。

Simon Ortiz (1941-) は、口承伝統とは単に話す聞くではなくライフスタイルを含む全過程——その社会の歴史・文化・言語・価値観・文学——を生きることであり、ことばにして語られるかどうか、行為として表出されるかどうかに関わりなく、その過程のすべてのこと、あるいは人びとが互いに個人的に社会的にどう対応し合うのか、ということまで含むのだ、と言う。だから、口承伝統の重要性とは、わたしの哲学がどういうものであり、わたしのアイデンティティということではわたしが継承している伝統がどういうものであり、またそれが著作という創造的表現においてどういう形をとるのか、そのことの重要性でもある。彼 Ortiz が口承伝統というとき、それはアコマ人 (Acoma) としての彼が、ただ物語を知っているとか歌を知っているというのではなくて、ニューメキシコ州と西部のアコマプエブロ共同体に生まれ育ったことが彼をどのように決定づけているかという意味なのである (pp.104-105)。

彼にとっては、書くことは言語を利用することであり、言語の利用とは口承伝統への注目であり、口承伝統は書くという行為の中で習得し発展させることばが現代でいかにそれ自身を表現するかという課題にとって根本的なものなのだ。それは一つのステップとか一つの橋ではなく、人生を歩む道の、あるいは旅の一部なのだ (p.105)。

彼は言う、先住アメリカ人は、この国がヨーロッパ人の植民地になる前は多言語使用者だった。母語だけでなく隣り合う姉妹民族・文化の言語も喋っていた。植民地にされたあとフランス語・英語・スペイン語が加わった。今日、書くという行為は、ある意味で言語を習得することであり、先住アメリカ人の多言語使用能力を拡張することなのだ。いま発展途上にある先住アメリカ人の著作伝統は口承伝統・言語利用と同調しているのである (p.105)。

彼も Momaday と同じく空間感覚について語る。人の誕生の地は単なる物理的ないし地理的場所以上のもの、つまり精神的な場所、生命の全体系、宇宙、創造の体系と力の総体とつながる空間なのだ。場所は人が何者であるかというアイデンティティの源泉であり、生まれでてきて使うことになる言語である。使用言語が拡大して別な言語で表現することになっても空間感覚はそう変わらない。そのとき人が繋がっているのはやはりあの精神の源泉、人が由来しているその場所なのだ (p.105)。

Ortiz は、英語は事物を規定するのに有用だと言う。しかしまた、ことばは規定ではなく発展性を持ち、経験の認知と表現であると考え。彼のいまの認知と表現は彼の原初的体験に遡る。アコマの出自で名前もそこに由来する。彼の言語形成は、両親を含むアコマ人たちの話し方、考え方と感じ方、認知のあり方に従った。彼はアコマの人以外の何者にもなれない。使用言語は英

語だが、英語使用の土台にはアコマ人としての自己についての原初的基礎的知識がある。言語学的な技巧は他の源泉から影響を受けることもあろうし、色合いは別な言語になっても易々と交換できないかもしれないが、ともかく起源の上でアコマ人であるという枠組みが、彼が書く内容と方法を決定する。アコマ人や先住民のアメリカについて一切書いていないときでも、彼には原初の知識がある。可能性はなくもないが、すっかり洗脳されないかぎりはそう言える。つまり、インディアンは変貌したが、意識的に潔癖に、根本的なものを顧慮しているのだ。自分は他の何ものにもなりえないと信じている限り、自分が言うことも他のことにはなりえない、つまり、彼 Ortiz はことばを使うとき必ず彼の本来のアイデンティティに即して使うのである (pp.106-107)。

Ortiz は、言葉は生き方だと言う。言葉によって知識を創出する。言葉はわれわれが世界を創造するその仕方である。人間は言葉ゆえに存在するのであり、意識は、あるいは世界は、言葉を通して生じるのであり、言葉は人生となる (pp.107-108)。

Wendy Rose が見るところでは、インディアン共同体はことばで仕事することを専門にする人びとを再び評価し始めている。かつてそれは伝統的価値であったが、寄宿学校に入り外国語を話し外国の神々を崇拝するよう強制されるなどして、話しことば書きことばを含めて自分たち自身の伝統との接触を失ってしまった。いま再発見され、文学愛好者によりは共同体のインディアンたちを前にして祈りの儀式の一部として自作詩朗読をする機会が増えてきて、非文学的な政治集会などで詩人や小説家が基調演説することの大事さが気づかれてきたことを彼女は喜んでいる (p.129)。

Vizenor は、物語るという伝統について、物語ることをしないでは世界は理解できないと言う。彼のいう物語とは、暗唱したり反復する物語ではなくて、体験を心に映し出すことである。物語ることをしないインディアンは多くない。物語らない人は聴き方を心得ている。物語は喜劇役者の一人芝居や寄席演芸でのしゃべくりなどよりもずっと人間味がある。そして人間愛あるいは生命のある最良の物語は視覚的記憶によるところが大きい (p.156)。

彼はまた、人類学者や植民者たちの使う言語は抽象言語だと言う。それは世界中から借りてきたもので、この土地、この場所との繋りはない。インディアンが英語を喋るときもそうだ。彼らが使う言語には具体的な動詞がない、感じとれる行動がない (p.159)。

自身を語るには気にいることばを見出さねばならない。人は自らを想像し、創造し、ことばを使って存在のありようを触発される。子どものころ人はその周囲の事象をことばで学びとることで存在のありようを掴みとる。わたしはこういう人間とわたしが口で言ってるのがわたしの真実。わたしの存在のありようをめぐるわたしの想像力の糧になり養分となるすべてのことばを寄せ集める。このような行為は極めて自分本位。チッペワ人の夢の歌も、たとえば「雲はわたしの歌を聞くのが好き」とか、実際は不器量なのに「わたしはバラのように美しい」と老女が歌うのも、自分本位。このように人は存在のありようを想像して描く。ことばで存在のありようを触発される。Vizenor は動詞に、人びとの行為に深い関心をもつ、そこに人びとの真実、存在のありようが潜むからだ (pp.159-161)。

7. 反抑圧とヒューマー

Momaday は今日の状況に精神の錯乱を見る。とりわけ彼と同世代のインディアンでこの錯乱——伝統世界ばかりか、その伝統世界の上に不意に巨大な暴力でかぶさってきた別の世界にも大急ぎで対処しなければならぬという感覚、を免れたものはないと言う。第2次世界大戦で戦場を体験したインディアンの精神錯乱を彼は描いた（p. 94）。

Linda Hogan は数篇の詩でヒロシマとナガサキの原爆投下の壊滅的惨状を描いている。彼女は原爆にも一切の戦争にも反対して弁舌もふるってきた。朝鮮戦争で父が軍隊にいたから戦争のことは幼少のころからずっと意識していたし、学校では机の下に隠れる訓練があり、軍隊では死の灰についての情報がしょっちゅうで、着衣を煮沸せよなどと言われていた。物心ついてからずっと周りにも暴力はいっぱいで、彼女はいつもやめさせる側にいた。戦争と平和の問題に没頭してきた、と彼女は回想する。地球と生命あるものすべて、すべての石も聖なるものと確信するなら、そのすべてを守ることがすべての人間の責任であり義務であると彼女は言う。最初の原爆投下で戦争はもはや起きず、すべての紛争を解決する方法を見つけるだろうという希望は砕かれて、Helen Caldicot が『核の狂気』で書いたように、ヒロシマへの原爆は新型核兵器開発の引き金となった、と彼女は言う（pp. 78-79）。

Ortiz は多くの研究者が民族詩学を論じてきた風潮について、問題の核心は搾取ということ、つまり植民地主義の展開過程、人びとの生来の力を強奪し、人びとの土地・資源・言語・伝統を奪取するという点にある、と論じる。これは土地や子どもはもちろん人びとの魂を盗みとることなのだから、黙視できないし、闘わずにはおれない。搾取とは差別であり、人種主義であり、人びとと文化と言語にたいする支配である。そしていま一つ、先住アメリカ人が直面し関心を寄せている現実問題から目をそらして、ドラムや鳥の羽や儀式などの事柄だけに真実のインディアンを見ようとするメディア攻勢と、作家がそれに迎合することの危険を厳しく警告する（pp. 111-112）。

Leslie Marmon Silko（1948- ）はアメリカは奇妙だと思う。人種差別があり貧富の格差が大きい。感受性の鋭い人なら困惑する土地だ。南アフリカの黒人やカラードの状況は、ウーンデッドニーのアメリカンインディアンと重なって彼女の心を痛める。ベルファーストの事態に心乱す。だが、人びとの泣き叫ぶ理由は分かっている、なぜ埋葬をつづけねばならぬのか分からない。自分は中間者に生まれついたのだ、と彼女は思っている。1976年のインタビューでアメリカンインディアン運動 AIM にふれて、「怒鳴り散らすよりは“Lullaby”のような話を書く方が効果がある」と言った彼女は、自分にできる最も効果的な政治的言説は芸術作品の中にあると考えている。とりわけアメリカでは、いわゆる主流とのあからさまな対決は極めて非能率で、主流は万策を弄してわれわれを打ち砕き武装解除してしまう。われわれの言い分で主流を魅了できるほどわれわれの数も多くない。それでも、主流の滅亡は確信している。時間の問題だと彼女は信じている（pp. 147-149）。

Rose は埋葬地保護のため闘ったことがある。AIM と考古学者たちとの間の調停役としてだった

が、考古学者たちはインディアンが考古学を研究したなどとは信じなくて、おまけに AIM と連携しているなら考古学研究者としての修練は本物ではないと考えた。彼女が5年間もそうした調査に従事していたのにだ。インディアンが考古学的調査団に加わっていたら、発見した人体も違った扱いが可能だろうし、何もかも発掘するなどしないだろう。埋葬地を保護するというのは実際の行為であり、同時に暗喩でもあって、つまり、インディアンに向けられた武器を、マスターして内部から打砕くことで中立化してしまうということだ。インディアンの墓地をひっぺ返そうとするブルドーザーの前に抗議の坐り込みをしたとき、市長は M16 か M15 で装備した特別武装戦術班 SWAT を出動させた。AIM が暴動をおこしているというのだ。来てみれば、われわれはただ坐り込んでいるだけだから、SWAT は引きあげ、われわれの埋葬地はなんとか無傷ですんだ。こういう事は頻繁で、当局は夜のあいだに工事することもある。彼女はこうした緊迫した現場で詩作したことがある (pp.124-125)。

アメリカンインディアンの小説、短篇、詩は多くの場合、ヒューマーが物語自体の真の本質の中核であり、その構造を形づくり、人物や事件に豊かな意味を与えている、という見方がある。往時の物語の場合より現今のものの方がヒューマーは辛辣で、残忍なほどだと Allen は言う。500年にも及ぶジュノサイド体験を経ると、つまりあなたをとり囲む別な世界があなたの死を欲していて、しかもそれだけを欲しているのだと知ると、あなたは辛辣になり、克服できぬまま遺伝みたいに受け継がれていく。辛辣な機知を育くむ。書くものは悲劇調になる。それほど窮境にあるからだ。それはわたしの、わたしの肉親の、共同体みんなの生命にかかわるのだ。笑うのは、死に向って笑うのだ。消滅ということを実に理解する反核の人びとは、一種の強靱さと明るさをもつだろうが、この国でアメリカ人は実際の死の意味を理解していない。ヨーロッパ人は2度も体験したから分かっているし、インディアンは500年前だけでなく最近に至っても、なお殺されようとしている、インディアン性を完全に抹消されようとしている。こうして、一方にヒューマーの伝統があり、他方で死の歴史があるのだが、この両者が組合わさると、作品の中に一つの力が生まれ、その力は作品を変容させ、意味を判別できる読者の中で変身を創出する。非インディアンには、書き手とその基本にある共同体との間で交わされる対話の用語がなかなか理解できない。作品の中で進行するのは「わたし」と「わたしたち」の対話なのだ。Allen はこう述べる (pp.21-22)。

Erdrich もヒューマーはアメリカンインディアンの生活と文学のもっとも重要な部分の一つだと言う。インディアンは本当に大したヒューマー感覚をもっている、と彼女は言う。読者は深刻な部分とヒューマーの両方を見てほしい、というのが彼女の希望だ (p.46)。

Hogan は、ヒューマーは生き延びるためのテクニクでもあると言う。貧困に喘ぐ人、極めて困難な状況におかれている人、苦痛をなめている人は、ヒューマーを開発しなければ絶望のあまり死んでしまう (p.77)。

Ortiz は絶滅と搾取に直面する先住アメリカ人を描くが、その作品は希望に満ち楽天主義的である。彼は闘いは常にそういうものだと考える。闘いをやめないかぎり人びとがシニカルになることはない、ときとして悲観的になってもシニカルになったり希望を見失うことはない。愛と思いやりは人間性の原理であり、とりわけ先住アメリカ人の場合はそうなのだ、と彼は語る。愛と思いやりがあるから闘いがあり、闘いは希望と楽天主義をはらむのである (pp.112-113)。

Welch は、「インディアンのヒューマー」は、物笑いの種にするというのではなく赤裸な姿を見てちよっぴりからかえる風に人物を提示するのが基本で、加えて言葉遊び、インディアの達者な地口——何百年も生き延びてきた伝統的なインディアンのヒューマー感覚と関わるものもあるだろう——もある、と考える（p.192）。

8. 女性作家の重荷

詩人・小説家・批評家でアメリカンインディアン文学の入門書を編纂したり研究書を著わした Paula Gunn Allen が、由々しいことながらインディアン女性について書くことは望まれていない、と語ったことは先に触れた。全赤色民族女性 Women of All Red Nations などいくつかの女性団体があり、部族会議・部族統治に関与する女性もいるが、フェミニスト女性となると事情は違って、女性でいくらかなりと関心を寄せるのは10%いるかいないかである。彼女はフェミニストを自称し、フェミニズムと自分の部族的背景・伝統は同じものであり何の矛盾もないと語るが、フェミニズムに賛同することは自分たちへの裏切りだと考える青壮年の男性の影響が、族長制政治力学やキリスト教化や女性の墮落と相俟って作用していて、フェミニズムは容易ではない、と言う。女性運動で活動的だったのに、女性同士の連帯が見出せなくて脱落した女性も少なくない。女性にたいする敬意を欠いては部族も何もない。羽根をつけて踊り回り面白可笑しいおしゃべりをして、部族でも何でもない。多くの人がこのことを理解していないのだ（pp.14-15）。

題材をしきたりとか口承伝統とか民話にとるとしても、男と女では象徴とか物語の構造の使い方が異なる。女性が扱う領域は赤ん坊と月経だけでなく、農業、住居の建設・保全、創造的営為、知的活動、哲学にまで及ぶが、その仕方は男性とは異なるのだ。両者とも霊的で自然の表象を豊富に使う傾向があるけれども、内容と構造の中にそれぞれの特性的な専念と視角が表出されるのだ（pp.15-16）。いま一つ、女は持続を扱うのが巧みで、男は戦争と死を扱うのが上手なのだ。それはそれぞれの伝統の違いからくる（p.19）。

女性の権利運動の世代とヤッピーのあいだにギャップがあるかと問われて、彼女がつき合っている女性の半分はフェミニストでありかつヤッピーで、ヤッピーの多くは公民権・平和・ヴェトナム反戦運動の経験がある。スタイルのちがいはあり、ヤッピーは繁栄意識に傾いて、たとえば仕事起こしをする。外見の印象と違って、彼女たちは深い所で精神的・宗教的で、独立独歩を学び現実と向き合う共同体を形成しようと熱心なのだ。埋めようのないギャップもあるが、所詮は同じ人間なのだ、と彼女は楽天的だ。そして、彼女はこれまでと同じように植民地化という問題から離れられないだろうが、それよりは女性の霊性——しきたり、魔術、信仰、政治などなど——の問題に取り憑かれていると言う（pp.31-32）。

Harjo は今日の合衆国でアメリカンインディアンの女性でいることの第1の意味は、生き延びてきた人間だということだと言う。インディアンが合衆国総人口の0.5パーセントしか占めないということは、独得の認知力を持っているということでもあるが、加えて部族間にも個人間にもある差異にも当面する。一人ひとりが違うのだから、それでも共通の夢、共通の糸があると信じる。

この時と場所でアメリカンインディアン女性として生まれたことは偶然ではなくて、何かある理由とか目的があつてのこと、夢の種子と責任をもって生まれ出たということ。彼女たちはいま世界意識をもち始めていて、合衆国と北米の部族の人びとを皮切りに、いまや中南米・アフリカ・オーストラリアのアボリジニーなどとの団結を見始めている。彼女たちは孤立していないし、問題の共通性があるのだ（pp. 60-61）。

Rose はアメリカンインディアンにとってフェミニズムは伝統と同義語であるとは考えない。彼女のほかにもフェミニストを自認するインディアン女性が多いが、非インディアン女性と同じようなフェミニストではない。基盤も歴史も違うから、ホピの保留地では自分はフェミニストでないが、カリフォルニア州フレズノにいるときはフェミニストだ、と言う（p. 127）。

Silko は土地所有権とか子の血統——まずは母の家系に属する——などの俗事で女性が重要な立場にあり、ピューリタンの性差別は一切ない、と言う。動物の交尾をめぐる可笑しい話を女性がしても構わないし、女の子が長じて語り部になる可能性もある。女性の方がたくましくて長生きするとなると、最後の語り部は女性になるかもしれない、と語る（p. 139）。

<1997. 11. 3>